

世渡の杖  
 一

福岡第一師範學校  
(學校圖書)

書名	號
世渡の杖	
著者	門子舟
編輯	部
總記	經濟學部
39264	次
2	冊
分類第	號
330.1	

4人  
 12/28

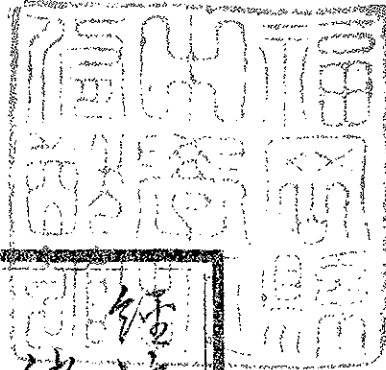
T1A1  
 23  
 Ka11k

圖書 和圖書 遡



a 1 3 8 0 3 2 2 6 8 8 a

福岡教育大学蔵書



經濟使蒙  
緒言

原書の「ソエラント」氏著の「所のポリチ  
カル、エコノミー」と題する書あり我々  
遠く先き曾て其書を讀し其初學教  
生の經濟學を讀む格様と爲る余之  
を得て讀むとす一回を辭俚に  
讀むも其意を淡くし其難し

明治五十年申正月

瓊江何先生譯

世渡の杖

一名經濟便蒙

盈科齋藏版

意ふに茲書乃如きの書、經濟書を  
讀むの如やあるが如し、又能く學  
問、學者の輩を以て經濟學の要領を  
あらわしむる是なり、苟く之を公け  
し、其裨益甚なり、以て國で先  
生、追う之をよ木せむ、情ふ然る  
先生、嗟乎、と涙さく時ふ先生、  
朝命を奉りて航海を渡之を以て通

き、由なり、然りと雖も又然るなり  
思ふに之を先生の乃弟と稱す、乃弟  
余の志を好み、迷ひ其本懐を  
遂けしむ、且婦人、經濟便衆の題  
号を以て、余に名を託する、亦  
信なり、軍と此ふ於る之を世渡り  
の杖と稱し、勿く、新刷氏、付書、故  
を以て序文を冠する、章、句を以て

邦人全編原稿の佚を刻は只そ又  
意ふ書あるんを必きなり看者  
願く之を體せ他日先生の教  
授を余之を履んのみ

五中冬春 門人 藤井宣強

經濟便蒙目次

卷の一

經濟學の趣意を論じ

第一篇 生産

第一回 財本

第二回 工業

第一章 人工の本末と種類を論  
す

第二章 人工の生産ハ造化乃助

力ハ依リテ次第ニ増す

尤モニ論ス

第三章 分業

第四章 工業の利分及生産力乃

増スルヨリテ之ヲ論ス

卷の二

第三回 大小工業を勵励セシムルを

その有様を論ず

第一章 概論

第二章 人民を勵励スルハ其源ヲ

其ノ勞作の利益を以テ

其ノ利益ハ妨クヘシ

其ノ事ヲ論ズ

第三章 人民を勵励スルハ怠惰

の者を困ラシムヘシ

幸論に

第四章 民智の智識の浅深

依りて勸懲の二つある事

論す

經濟便蒙卷之一

檀江何禮之 譯述

經濟學の趣意を論ず

夫を經濟といふ。國中の衆人とも。一人の才  
もも富を求る仕方を教むる學問なり。其趣意  
と莫増し或は論をへし。抑も富といふもの。若  
人の希望をかあへて。困らぬよふ世と造り。或  
は我利を以て人の利を換へ。我國ふ所とも彼  
のふふなく。又彼の國よりとも我ふふなき。お

物と考へて交易す。互に融通をもするをいふあり。  
そのお抱の中。交易の出来ると出来ぬと有り。  
先づ日月の災。風。大蛇の類。人の希望をかなや  
るまい。世の重宝とする。缺く人の知る所な  
きとも。之は不謂道。お抱の益を盡さず。誰か勝手  
は不持さうや。他のお抱と交易する。おと  
は出来ぬあり。金穀薪炭はいくらで。我ら希望  
をかなやむ。勿論。おとと人と交易して。代抱と  
均す程のものなり。経済学は於る。唯此の交易

の出来るお抱のみと。安といふと知らく。

倭債といふ。吾人の希望をかなやむ。きお抱の性質  
として。大抵は人数資本と養ふ性質有り。之を大抵  
の倭債といふ。人の渴を止め。抱を清むる。水の  
倭債。抱を温め。燥を去る。火の倭債。皆夫々の  
性質有り。

世の倭債は。お抱の中。二つの別有り。吾人  
の希望をかなやむをうり。他は交易して。其代  
たる。代抱をえとざる有り。まあ取とる有り。其代

物を取らるゝと、交易の價といふ。其まじきと固<sup>こ</sup>ま  
の價といふ。之を別ちていふ。吾人の力や力と  
費さるゝて不<sup>ふ</sup>とかなふ。何れも自由と  
入<sup>い</sup>り。用ひて尽きむ。取<sup>と</sup>りて餘<sup>あ</sup>り。即ち  
おまといへる日月の光。風。大氣の類。固有の價の  
みりりて。交易の價いふきりのなり。  
それと遠ふて。人の勞<sup>ろう</sup>作<sup>さく</sup>と估<sup>か</sup>とさといふ。吾人の不  
至<sup>し</sup>とかなむるは足らむ。或は又と其<sup>そ</sup>ふは限りて。  
他は出来さるお拍りり。是等ハ即ち交易の價也

らるゝものあり。其<sup>そ</sup>の今更<sup>け</sup>はお拍りり。されども  
自然の價といふ直<sup>ち</sup>は用ひらまむ。故<sup>ゆ</sup>に又と價も  
す。人<sup>ひと</sup>の志<sup>し</sup>を取り力と費<sup>つ</sup>て。後<sup>のち</sup>に不<sup>ふ</sup>價あるおま  
きあり。左<sup>ひだり</sup>振<sup>ふ</sup>なるもの。即ち其人<sup>そのひと</sup>が其<sup>その</sup>價のま  
とある。若<sup>も</sup>し他人<sup>たにん</sup>よりその物と不<sup>ふ</sup>とるに。此<sup>こ</sup>の  
必<sup>かならず</sup>をお<sup>お</sup>の價と取り。或はお<sup>お</sup>の物と易<sup>か</sup>むるを  
り。然<sup>しか</sup>し我<sup>われ</sup>今更<sup>け</sup>は又<sup>また</sup>を換<sup>か</sup>り。ゆゑと。唯<sup>ただ</sup>よて  
いふ。之を他人<sup>たにん</sup>へ與<sup>あた</sup>へむ。其<sup>その</sup>時<sup>とき</sup>のお場<sup>ば</sup>を考<sup>かんが</sup>へ  
て賣<sup>う</sup>り。又<sup>また</sup>は代<sup>しろ</sup>物と易<sup>か</sup>むるものあり。一<sup>ひと</sup>文



いらる。彼も彼も我物を用ゆる。彼れ日月の如き。固有の價をうりて。交易の價なき不物に限るあり。おと論をかく。人各々その產物とて交易して。有と無とと融通する。必竟我勞作とて。彼の勞作と換ゆる訳して。銀と以て金と換るに。一兩目の銀をもつて。一兩目の金と易つゝとく。必らに數倍の銀は得られ。漸く一兩目の金を得る。是れ是れ金を得るの勞作。銀と得るよりも莫大ある。此の如き不同

ありあり。

此故は不物と交易する價は。其物と得る爲め。費する勞作の多少は依りて。此價の高低と生るものなり。おとと法物の價位といふて。天然の理なり。

然りと雖も。其不物時の出来ふか来一極なり。ね。天然の價は高きと安きとより變へ。今一物の生産多きに過ぎると知れ。人々の使ひ用は供て餘りを生る。既は餘りなり。之を購ふもの

の救ひ。次才は減少して。不拍よりく捌けを。其  
拍捌けね。拍主は一時も子く其拍を賣りて。換  
のおき用人を軒婆とも。故にお尚の價より。と  
待つ暇なく。買ひ人を求め。直におきとお賣よ  
して。盛衰の損失を厭ひ。是にお拍多けま。價  
おきとけあり。又おきと遠ふて。産拍の救減少よ  
して。世上の使ひ用は足らざる。人々競ふ  
て其拍を買ひ求め。噂と生ふ入り難き。おとを  
憂ふ。故に一時は拍の價大に引上り。お尚の如を

をね越ゆる。是を全く不拍減少おま。價高く  
あるとけあり。おの上け下を救を。おとつ。ハ  
全く一時の出来不お来より。者として。拍の價  
の大お。全く生産も。労作の費より起りて。遷  
り変らざる。おと。種不水の低き。おと。如く。い  
つも同一道程とある。あり。

生産とい。お人も。人や力を費して。それくの  
お拍よを。ま。の價と附け。又お人も。お  
望をか。おつき。切能と興ある。と。おあり。操

り物を生し物と産する。天の造化の働きなり。  
人ハ地と天の生したる物は、仕上げをもちつけ  
たり。鉄ハもと天造の物なり。人のよく生むる  
はろくは熱きとも、鐵山より掘出し、能く鍛錬し  
て純鉄となり、おまともつて鋼と製し、おれをも  
つて刃物などを作る。いとゆる人の仕上げな  
り。之が爲め莫大の便と附るあり。之を経漸學  
ぶからん。生産の方術とす。而してかくの如きは  
人を經て、其價を生じざるものと產物或は製

品と名つく

戦<sup>あそび</sup>なり。未<sup>も</sup>と勞<sup>あそび</sup>作<sup>さ</sup>と費<sup>あそび</sup>より製<sup>あそび</sup>品<sup>さ</sup>とありき。物<sup>もの</sup>  
 料<sup>りょう</sup>より之<sup>これ</sup>を精<sup>せい</sup>製<sup>せい</sup>する機<sup>き</sup>械<sup>け</sup>。又<sup>また</sup>は職<sup>しやく</sup>人<sup>にん</sup>よりと扶持<sup>しほ</sup>  
 する衣<sup>い</sup>食<sup>じき</sup>の給<sup>きふ</sup>料<sup>りょう</sup>及<sup>および</sup>い物<sup>もの</sup>料<sup>りょう</sup>を一<sup>いっ</sup>變<sup>へん</sup>して製<sup>せい</sup>品<sup>ひん</sup>とあ  
 する法<sup>はふ</sup>也<sup>なり</sup>。未<sup>も</sup>の四<sup>よ</sup>件<sup>けん</sup>と概<sup>くわい</sup>してつゝあり。

交易といふ世人は能く不能なり。一人として救物を  
製するは。皆ら一物を製するの便利はあらず。交  
はわいて百工の業分る。各其職を具しして。手は  
おねをあたふく。一人は終に一物を製する而已

とある。然るに其使ひ用はむらり。百拍とく  
く々倚るるよりされ。若人の不世と違  
て。世を滴るに異なり。履匠の履を作ると以て家  
業とあせとも。履を用ひて飢渴を防ぐ訳り。少  
う。身体と暖むるおと勿偏できん。尤もこれ  
必ら其履を以て。未と布とよかえざるを好む。  
是を獨り履匠のみあり。終く此の世を治る。若  
も人も亦皆不然とさふ。それゆゑ。開け  
るふに。交易盛なり。若の商業はるりて。およ

一つとして不自由なく。役用を盡さるおと。な  
まり。

一の業を修むるより。若ら一人の心や力を費さ  
るよりてなく。数人の力を合せて。大なる利業を  
得る事あり。おとを分利といふ。小刀を製し。縫ひ  
針と造るる如き。極めて小細工に似れども。数  
人あ合ひ。そまゝ仕事と分け配りて。生錢と販  
ふ者あり。又、焼皿と付けるものありて。数人の  
手を経て。始めて小刀、小刀とあり。針、針と

る。その小刀針の價より。此數人の勞作もこなす  
りなり。然るに斯く僅の物とて。おまを作りに  
い。おまのふ力を費せし。人々それく。其價を  
かけたりて。已う不爲ともあり。之を分利と名  
づく。

凡そ物を作るおとらき。亦さ必ら以物と費し  
ことなり。其道は二条なり。先づ麦と  
以て之と繋ふる。種子と播き。彼是と勞作を  
する。實のりて後ふ之を收納し。之を蓄ひて新粉

とふをより。之を一物と費し。一物と生じ  
といふ。おまの新粉と繋ふなり。人々の口腹を  
養ふて。そのおまをかなへるなり。又他物を  
生じ。おまを。おまを價と換ふなり。いふ即  
ち消費といふこれなり。

故に經濟の大體は。恒に區別して之を學ぶ一  
し。才一は物と生産する事。才二は交易の事。才  
三は利分の事。才四は消費の事とあり。

才一篇

生産

生産し、其始に賃なきお相と。人工を用ひて賃  
のちにお相となすものにて、いそめる奴才は人  
の労作と加つて、一のお相を造るをいふあり。また  
生産と論するより、先づ才一は奴才、才二は労作、  
才三は奴才は労作を加ふる仕方。此三段を解く  
事を所要ありとす。

才一回 財才と論を

奴才といふ。お相を生産するは仕事は就きて、是れ  
かゝるはなすぬお相。或は生産するより付きて、か

用ある道具、或は生産にかゝる。工人の衣食給料  
などといふ。或は雇ふは、雇ふより金換、石炭  
の類。即ち造化自強の品と。産出をも同難用とい  
ふあり。奴才ども人のよと強て、其労作よりして、  
既にお賃あり。お相と解めば、更にお賃と精製  
して、賃を増し付る者ともいふあり。

奴才の品も職業の種類有ぶとく。操るにかゝり  
て、一は定め難く。種子或は妻帯、或は牛馬おぞは。  
農民の用料。又木綿織物、細工人の用料。交易の

諸君の。高質の用料とある。而して生産不能を要  
の。道具の。おりの。も。農民の。細作と用ひ。紙活字の  
紙と用ひ。織物の。機織。も。質の。糸車。その他。人々。必  
用の。衣食住。の。法。の使用とある。意地。不。ある。ま  
で。かり。その。め。も。生産の。助力とある。りの。を。要。く  
紙。本。を。も。さ。る。い。あ。り

紙本の綴通

今も君も断へども力と費して。件  
の。便。ある。紙。本。と。精。製。して。更。不。ま。と。便。ある。紙。本。  
と。持。ち。の。種。と。ある。故。紙。本。は。始終。派。を。交換。し

て。一。変。止。ら。ぬ。其。の。般。か。ま。ば。其。の。一。変。して。  
其。般。と。不。便。と。増。して。工。作。の。労。作。を。償。ふ。不。足  
る。あり。さ。も。れ。ば。一。相。と。不。便。化。せ。し。む。る。と。も。  
其。益。と。い。ひ。ふ。だ。う。と。い。ふ。

紙本の増張

紙。本。の。増。張。一。変。へ。ば。一。相。あり。一。度。変。化。して。其。  
償。一。般。増。を。と。り。へ。其。紙。本。も。増。ふ。て。一。般。増。を。と  
り。へ。変。化。し。ある。後。の。償。より。その。変。化。せ。ざる  
前。の。償。ひ。と。引。き。去。り。其。餘。の。もの。即。ち。其。利。益  
と。ある。あり。蓋。し。今。一。の。相。と。変。化。を。する。あり。その。





世上より金銀ほど。價の多きものゝあり。今之と  
銭中の肉より。僅うの物といふ。をないうゝとあ  
るべ。今君人の富貴上と。測りうゝ人あり。其多き  
あと。素より田産實銭ありて。金銀の値。を一分  
と。みこぎぎる。へ。一人の身上期のおとに上  
り。之と推し。全國の儲蓄も。ま。此の理あり。  
金銀銭札の。と。う。さ。る。来。察し。知るべ。

貨幣の銭中貨幣の銭率

形と愛へ。金と換へて。  
刈倉と生むる物と。愛むる銭中と秋と。而して出

の變化と銭をうゝあり。用ゆる。乃を數と。あると用  
いて。利益と生むる者。と。定銭中と稱も。金へは米  
麦粟土と。春の愛銭中あり。細紙と其定銭中あり。  
穀類木綿と。織工の愛銭中あり。工場機杼と。其定  
銭中あり。

ふ土の盤胃も。ふたぐあり。不偶愛銭中と以て。  
定銭中も愛ぜ。む。世の。を。換。み。推。し。極。る。あ  
り。金へは農民。その收穫。し。る。麦。と。賣。り。て。金  
と田地と買ひ。好。き。道具と求め。工匠ハその年の

利益ともなり。細工率と盛太ふを。故に時世の閑  
り不程小。蓋く大造の金と惜すを。舊法河原一ふ  
どし。日用の便り。進歩するあり。あきり  
斯く世運のまゝみ開けざるあり。死る所の  
利益ハ。利又莫たあるものあり。その定銭ハ。一  
朝一夕ふ。さるる者あり。さるる者あり。変銭ハ。とも  
ろ。一ふひ定銭ハ。とるを。其利沃穰世に傳  
り。歲月の遷るに後ひ。土の氣運と年々。終  
り。經濟の要品。一つも不自由なく伝わり。爲め

る。玉柄とどあるあり。昔一土着あり。我ふと領  
あり。時代と。と世とと較らべ。細密の面目  
と換へる。米の。寧ろ驚くべし。みあると。因り  
ざる。との。遠い。依るものあり。其元ハ。変銭ハ。決  
定。換り。定銭ハ。とあり。年月と。種るほど。全  
國中。小。疎慢。ある。故あり。傳ハ。我。労働。ま。る  
利ハ。永く。不。孫。不。傳。り。て。を。爲。不。達。を。その。大  
本。と。爲。ま。ば。皆。智。學。同。より。出。づ。る。ハ。あり

第二回 工業

第一章 人工の本質と種類と価値

夫工業と云ふ。人の力と費して。物の價と作り出さる。偶あり。而して人の力の能く生むべき。物の價と分くら倫どもあり。先づ工業と用ゆる。不同あり。紙知るべし。其仕方と三類に分つ

第一 農民一たび種と播て。実と獲るふするま。雨霧と見と望し。養穰と見と養ひ。此等の切能。漸く變じ。麦とあり米となり。農家の收納ふ。是れ是れ農家養穰の力。其根元の物質と變じ

る。米麦とある。沢けあり。金糸糸。製米師の一物と精練し。又一一物と生産する。ぐぬし。け工業と物質の變化といふ

第二 船造り。一條の鐵杆とさういふ變ぜりあり。釘や刀と造り。木通ハ板行と變ぜりあり。漆喰と造り糸と建て。綿通ハ生綿と變ぜりあり。糸と造る。搦りけねいの工業と。物形の變化といふ

第三 糸糸あとの。物の形と變ぜる者あり。た。唯これ地より獲入る。る。る。る。る。地へ運び送

り。其変と變遷をもつのみあり。馬車の持主。鉄道の  
持主等。悉く此の工業と物所と變化  
をもつる

凡物所と生産するがゆゑなり。人々休息せざして。  
工業と勤むる極意なり。不克前ふいえる。三変中の  
一変と爲る中あり。あると農工商の三大業とい  
ふ。多くは其二業と兼やるものあり。農氏と耕  
小民と賣るといふ。列ち二業と兼勤るといふ。其  
故ハ耕作と農業あり。運送と商業あり。然  
るども人々一業の中あり。始終仕送る所を

ひて。その工業の名を分つあり。譬へば刀劍と服  
造。家屋と建造。或ハ木綿と紡ぐ者。何れも工  
業に属せども。之と一般ハ工人といへる。又  
く。服造とつひ。大工とつひ。木綿とつひ  
が如し

此等の工業のいづれも人間の便利と。増進む  
る。缺く處なくざる者なり。その事業もろえ  
ろあるども。互にお助け。お頼り。邪魔とせむ。其  
華の世界と爲るなり。故ハ一業と廢止ば。列ち

一羽の鷺と鷺の理あり。鷺一は農業あり。鷺の  
飢餓と免れど。織工あり。寒き飢餓と免れど。鷺の  
物と運送するものあり。人々其製作する  
物と。捌く便りと失ひ。世上の融通はと止り  
て。農民は米穀と身不<sup>ま</sup>嫌<sup>ふ</sup>る。冬は衣履を難く。織  
工は布帛と以て。飢渴と止め兼ね。工匠は其細工  
物と。つと。飢渴と防ぐ事の出来ぬ。何れも同  
様と。夫くの融通の道有りてある。人間の愉  
快と。有るあり。さうば。農工商の三家は。天啓の

の外。一つもなくて。かたよぬ者と知るべし。  
ある人同ふて曰く。今一姓の民あり。農あり。工  
あり。又商人あり。又。醫者。法律師。僧侶。  
と。統し。ちと。つと。仕業あり。ざら。米穀と  
食ひ。布帛と着て。舟車に乗る。つと。つと。つと。  
人の労働と。更なる。計りあり。豈に其用の者不  
り。むや。柝も破ら。三等の外。何れも。世  
の中の。利益と。有る事ありや。答へて曰く。その  
ねは。玉極む。さう。一概に。よつと。沢け。み

らば。譬へば今日大艦と信り。千百里の遙ある大  
洋と。安難不虞うとする。莫大の便利あるへ。莫小  
者不なぐべからざる。出来ぬ程まきりとする。あ  
なり。叔その中と尋ねるべ。書物とよみて。天地の  
深。水の上小艇と信るべ。道理と辨へ。天文と測  
り。地理と考へる。賢き人あはべある。航海術も  
怪く異なり。今ふありてい。風波と凌ぐも。平地と  
行ふ不異あるべ。抑も儒者。生徒に弘思と凝して。  
書籍と授く。終身と是と學べ習ひ。人の人たるを

とく。醫者の死生の乃理より。藥劑の切結と研  
究。諸人の病と治療を。さるべ。此人の業と古  
る道い。世上莫大ある。利益あるもの。明かなる。  
是故小人間の有用とある。唯衣食及び。諸具  
と修るもの。即ち農工商のみあるべ。精神と勞  
。其事と考ゆるもの。即ち儒醫僧徒も。あてい  
叶ふ事なり

去の故小人間の職業とて。つるを三類とす  
也。第一類い。天地の物理と説明する者。第二類い

其發明もる理もさう。まゝく益のある。器械バク

と考へ出さる。第三類ハ農工商是あり

第一類といふは物事の道理を教めさるもの

一。例ち誰もいふ小彈をさる。其物の力と度

明あさる『アイサツクニエート』氏。電氣の切用

と知りさる『フランクリン』氏。金器の名人ハム

フレーデウイ』氏。おどの如き名ある先生こ

とあり

第二類といふ。初めく新工夫の器械と作るも

の所ち蒸氣機械の元祖ワット氏。之と航海小利  
ひある『フルトン』氏。是とあり

此の第二類中ハ民法の及理と生まへる。金銀

田地の公事訴訟と。取捌く法律の學者。又ハ醫師

又ハ宗教の教と傳ふる人あり。法律家何とバあ

そ。其づ家産と保ち。損失さるるあ。其づ公平の

及んで。無理ある幸ハ。上下ともささず。醫師わ

まバあそ。病と療治し。息才ハ身と養ふの方と知

り。僧徒あまはる。其氏天の道と守り。心と法律

あり。現世未來の幸ひと、行りけりものあり  
又三教といふの重宝ある鼎也。ハ生産―賣買  
―て不足と勞まる。職業の者あり。農工も買こま  
あり

こと小授りゝるゝにハ世の中の繁昌して。若  
づの人々。能く其生と養ひ。その死と送り吊ひ。人  
々の當然の事として。世と濟るハ。全く前條の三  
教。お結び合ふ。世上の利益とある小保るあり。  
その三教のうち小かり。そのおも保るゝがらある

とけきバ。世の衆とあり。國ハ其必を存し。ゆき  
るあり。故みよりゝく。左の者の。助け合ふ如く。  
ね共ハ其業と務む。若し一の教ハ亡きハ。別  
ち二つの教ひも。保るゝと亡びるゆえ。兎角力と  
合せ。世上の福と授り。またなきなり

この故ハ人衆く。以三つの教ハ氣をつけ。而して  
その一業ハ。力と存し。怠るゝ者ハ。必衆と利を  
るものといふ。ば。互ハ人衆ハ。生を來す。智慧  
とく。つけら。必衆の利益ハ。心と勞せ。力と



盡さば。況ら小日月と送るもの。世の中の廢物  
あり。飢辱必らむ其身不及べ。第一。第二の類  
ひの。職業のおとに。衣食と製し。飢寒を防ぐ  
者。何れども。拘り。農民の利益と伸る者  
あり。其業を勤め。其報いとけり。も。実なる理  
あり。べきあり

第二章

人工の生産ハ。造化の賜カハ  
依り。益すことと論じ

夫も人工の生産と云ハ。年中たえず。君子の抱ふ

と産出さる。は。いふ。の。あり。要へば農民一日の  
仕事あり。一斗の麦と獲る時。刈ち其一日の生  
産力ハ。一斗ありといひ。二斗と獲る時。其力ハ  
二斗ありといふ。ま。一日ハ一斗の終と續げば。  
一斗の生産力あり。十斗あるべ。十斗の生産力あ  
りといふ。何れも。皆然。然る。は。あり

生産の力あり。ま。む。後。その。本人あり。ひ  
ふ。他人の利益も。ま。加増して。雙方の便利とあ  
る。あり。穀ひあり。要へば。瘠る。田地と耕と。肥

ある田地と耕をと。その背折ひひとりあるとも。  
その收納ありてい。大いなる多寡の遠ひなり。ゆ  
へに。農業と繋るものい。佳しき肥する田地と母  
んで。瘠する田地と厭ひざるいあり。是肥する田  
地の生産ハ。瘠する田地の生産より。條計の利益  
あるなり。つてあり。如何とあるべ。今その收納の  
多。増し進むとある。こゝをとりて。他人と交易を  
する。其得る知の亦物も。又と云ふ。加増し。自つら  
ら物販の便。廉直なり。て。商人の便利とあるあり。

斯く互の便利とある根元ハ。必竟肥する田地ハ。  
生産の力ら多きと。瘠する田地ハ。生産の力ら寡  
との。別ちあるあり

都ての職業。も然るざるいあり。今紡績とある  
人あり。その機械の運用と知るむ。こゝを紡ぐふ。  
た。十本の指とりつとあるとある。日必より日  
後まじ。破折せむ。て働きても。一日の生産とそ  
るふ。僅の線ありてい。取るを。繰車と用ひて。  
こゝを紡ぐとある。一日あり。数日の分とあるべ

一。又蒸氣を仕掛くる。精巧の機械を用いて。是と  
紡ぐと見へ。一日あつて百倍の條針とも。多うけん  
一。形く骨折と省き。生産を増えと見へ。その機  
人。一己の利を増えものゝあつて。廣く市中の益と  
あるあり。是れ農夫の瘠くる田地と舍いて肥  
え。田地と耕せば。自他お互ふ。利益を蒙るが如  
く。其利益といふは。同ト骨折あり。多分の生産  
と取り。而して主中人は。多分の賃銀と得るは勿  
論。主人も潤沢ゆたか小廉價せうれんある品物と得るあり

この故小昔より。人々思と居る。生産の力  
を増え。き方術と工夫せり。其工夫が成功せいこう小産  
一。人間の便利と進めと止まざりき。試み我々  
の人と。辺疆の土番とと並ぶるゝ見へ。後世の  
為換ふ。雲泥の別あること。三葉の童子も。能く我  
ども新あり。是を全く。他の級級あり。受け小所  
を。此は民の智識因る。生産の力を増進する所  
を知り。古番の愚昧ありて。之と知らざるがゆゑ  
あり

きく人工の生産力と加増する法ハ。次ハ若し二  
彫の弁ふることあり。第一ハ造化の力一名化  
工と稱し用ゆる者。第二ハ鐵業と稱し保するもの。  
是あり。次の匠より先づ化工の性質及び用法と  
解き明るをべし

化工と云ハ造化自然の能力あり。亦是と藉りて  
をつゝ人の所望と違ふを其物の性質とさし  
てりふあり。試み木ハ火とつゝて焚くを火ハ  
熱と致す。熱ハ化工なり。熱と致するハ木の性質

り。木の化工の性質とつゝ飲食と意識するの  
用と違ふ。又熱と受けを擴張し。冷へて収縮する  
ハ。蒸気の性質あり。蒸氣ハ即ち化工あり。木の化工  
の性質とつゝ。舟車と運送する。機關の力と生  
む。まゝ水の性質より。低き處より高き處に。重力  
と起るハ。こゝ水の性質あり。水ハ即ち化工あり。ま  
の化工の性質とつゝ。磨車と轉回を起る。一物  
をめぐらむ。格別の性質ありて。人間の便用を供  
す。磁石の力と指し。薬石の痛と治め。各々其の

切能と存するも。皆此理不出で。一として化  
工の性質。何ぞざるハあ

吾人の欲望と違ふんがと。不<sup>き</sup>態と招<sup>き</sup>めと求<sup>め</sup>。  
其<sup>は</sup>媒<sup>は</sup>的<sup>は</sup>不<sup>き</sup>なり。化工と稱<sup>せ</sup>り。用<sup>ひ</sup>ゆ。此<sup>は</sup>招<sup>き</sup>めと名<sup>づ</sup>  
け<sup>る</sup>。器<sup>は</sup>具<sup>は</sup>と云<sup>ひ</sup>。或ハ機械といふ。斧ハ藏<sup>の</sup>利<sup>の</sup>  
小<sup>は</sup>なり。樹木と切<sup>る</sup>断<sup>る</sup>するの<sup>は</sup>器<sup>は</sup>とあり。蒸<sup>気</sup>機<sup>は</sup>  
関<sup>ハ</sup>。蒸<sup>気</sup>の<sup>は</sup>縮<sup>る</sup>張<sup>る</sup>不<sup>き</sup>依<sup>る</sup>り。舟車と運用するの<sup>は</sup>機<sup>は</sup>  
械とあるなり

凡<sup>は</sup>経<sup>典</sup>通<sup>る</sup>学<sup>は</sup>不<sup>き</sup>おひ。化工と稱<sup>せ</sup>り。用<sup>ひ</sup>ゆ。大<sup>は</sup>至<sup>る</sup>意<sup>ハ</sup>

其<sup>は</sup>力と器<sup>は</sup>と云<sup>ひ</sup>。吾人の便<sup>り</sup>とある不<sup>き</sup>あり。  
此<sup>は</sup>力と器<sup>は</sup>力と稱<sup>せ</sup>る。運<sup>力</sup>といふ。舟<sup>ハ</sup>と漕<sup>ぐ</sup>者<sup>の</sup>機<sup>は</sup>と  
器<sup>は</sup>と云<sup>ひ</sup>。本<sup>ハ</sup>と代<sup>る</sup>者<sup>の</sup>。斧<sup>ハ</sup>と執<sup>る</sup>力<sup>ハ</sup>ある。是<sup>ハ</sup>あり。其<sup>は</sup>  
力<sup>ハ</sup>より。多<sup>き</sup>なり。其<sup>は</sup>業<sup>ハ</sup>より。大<sup>き</sup>あり。大<sup>き</sup>  
人の<sup>は</sup>業<sup>ハ</sup>。小<sup>き</sup>人の<sup>は</sup>業<sup>ハ</sup>。何<sup>も</sup>も他<sup>ハ</sup>あり。その  
運<sup>力</sup>ハ大<sup>き</sup>小<sup>き</sup>あり。而<sup>して</sup>化工と。稱<sup>せ</sup>り。用<sup>ひ</sup>ゆ。  
るの<sup>は</sup>工夫。何<sup>も</sup>も機械と製造<sup>する</sup>。何<sup>も</sup>も。其<sup>は</sup>力と  
運用するの<sup>は</sup>。方<sup>ハ</sup>則<sup>は</sup>と定<sup>む</sup>る不<sup>き</sup>あり。あり

あの機械と運用をべき。化工ハ二<sup>ハ</sup>なり。所<sup>ハ</sup>ち有<sup>る</sup>

生の活物の力を生の力を是あり

活物の化工といふい。若くと挽除ありありい。然るに

載さる。獸畜あり。牛馬あり。強壯あり。象の類あり。是あり。人

此の化工と使用する。人あり。大なる勞力と省さす

て。生産と加増す。即ち農民一段の牛と用ひといふ。

穀十人あり耕をどる田地とも。一人あり耕す。一

馬の力と藉をい。穀の播をとも。一人あり運輸

とあり。活物の化工といふい。若くと挽除ありありい。人と

の新室と殿新をどき。新室の能力あり。新中室殿  
あり。い。風瀑泉。地硝。熱氣象。是あり

風ハ居動の二カ有り。磨車と運轉する。い。

居所と初りさる者あり。之と居所の力とい

ふあり。又と帆と吹き。舟と進めなどあり。居所

と変える。そのあり。選動力といふあり。此の二カ

と用ひする。居の力と要することあり。其切

甚莫大あり  
瀑泉ハ只。居所の一カあり。大なる力と要すべ

を事業不用いて其利甚だ大なり。行と製し粉と  
磨き、棉と紡ぎ、布と織る等皆ふこの力と。粉まぎ  
るゝあゝ

塩硝へ戰場あり、鉄砲の弾と飛し、御桶あり、  
禽獸を射殺し、また岩石を破裂して道と開き、山  
と谷、河とさへ。また、鉄石を製する家の用不  
供を

是れハ民生の中、ゆくも、ねんてき援群の切用とあをあり。  
故に百穀の工業、十ふ八九ハ此力より、さるゝハ

あゝ其用ひり、よろゝとて、海陸小拘らむ。  
大小の力、居動の勢ひあるまじ。人の意のすゝ  
あり。子安とあふふ、又あり。又、大室とつふ、  
一、係、其優頗る、うまい客易、小貧民のふ、  
か、かゝるゝと、憾むのゝ。試、小眼前あり。其切、  
るゝ。小、針網の如き。線と紡ぐべく。鉄鏈の、  
巨網と編む、布帛と織り。磁、おろ強と、  
ありて、大艦と運、おろ陸、小、おろ大車と、  
うせ。また、材木と、おろ行板と、おろ糸、おろ人

同の意匠の及ぶる工業は皆其不可思議の切用と作らる

総て力を用ひて物と製する法業はおひく。死物の力の風の切用。活物の力の牛馬の優るおと多しとを其理とす。おひくふを

第一 死物の力。其優極めたる廉あり。今百馬の力。換るべし。然る様。其優ひ。実小百馬の馬と実ふより。廉値ゆて。之と使用するの失費も甚ぶあり

第二 死物の力。休息するあり。牛馬は是をせへば。必ず休息させざるべし。機械は日永運動して。断へるあり。と。ども。更不疲するあり

第三 死物の力。是を使用する不安あり。いりふとあるべし。無情の物あるゆへ。喜ひ怒ること。逃げ走るおとあり。ま。外物。怖。是。驚くといふおとあり。初。一定不易の法とあり。これと使用をなす



又曰 死物の力。疾病の患あり。牛馬と使用  
するに、お急の使ひくさあり。操りふくまを  
使ふに、病と生れども、機械不即りて、始  
終使用し、替の隙ありと。いづれも、病と生れ、  
の疲まるといふふとあり

又曰 死物へ其働き、活物より速うなり。是れ  
速うあるべ。生産も速うお増し。大いにお増し  
省くこと。言までもあり

人の死物の急うする者あり。その智慧よく、死物活

物の力と考へ出さるゝあるむ。更ふく。機械と  
工夫し、より。其考へ出さる。死物活物の二  
力と。自在に使用すると得るあり。譬へ、蒸気の槽と  
管と。工夫ある上あり。此二機、蒸気力と。  
能く、蒸気と知る。然れども、更し。輪車、杆條と。  
製造せざるに。思ひのまゝ。蒸気力と。  
いづれ。又牛馬と畜ひ、馴して、車と挽くさんと  
あるべ。輪輻蓋輪と。殆ど、其判令と。いづれ。  
かくのおとく。死物の二力と。自由、使用を、さる

機械と。物理学より機械力と稱し。人智の運用  
不能より其機能を教へ。その教明なるは化力と。  
自在に使ふあり

条件の化へその力を生発して。是を人小使と  
するの事あり。おふりて。大ひ小人の便利  
とあり。ちとあり。金の教へ。熱と交ま。そのま  
るける質と具せり。故ふとと型の中へ注ぎ。冷  
へると注ぎ。なり出るとれ。其型小遠とざ  
形とある。是と人力あり。注ぎ小較あり。と

勞甚どおふ。其切要ど多し。若し金教へ。熱  
と具せざるとれ。活字版の良法も。はるる。一  
本の書物と出版するあり。教万の文字とあり。  
一まづ。彫らねばかふはざ。べ。然とど。華  
。其質の注けやとれふより。精取さへあり。は。  
種の子間あり。意ふ。の。教百の文字とあるあ  
り

かくのぶと。性質を用ひ。便利と考へ。おふの  
教へ。是とあり。と。書載るふ。小。ね。あり。は。若

人甚能たを能くみふに在り。ありおふ物として  
皆ふそ色くくの用ふ。能くせざるは吾とあとい。知  
るを

### 第三章 分業

既小論せしがごとく。人工の生産力と増益とを  
み。第一小量物の品質と研究とを果して生産  
の力と致さべしや。あにやと發明せざるふあり。第  
二や。一ある其力と生致せざるに在り。ことと法  
用とを。方法と工夫とを。あり。而して又生産

力と増益と。一の原因あり。あとい分業といふ。  
この四角の莫大あり。第一章より三端力と。分  
業とあり。あといあり。

分業といふ。預り定め定保と立て。人々それ  
それの。一つの業とあるもの。外の業とある  
ざる。これの分業のありと。あといとあり。つて。  
此の世の中の。国けつと。能くせざる。知るべ  
し。夫は経済といふ。す。国けざる。一人は  
て。より。此の業とある。あとい。今日。田

地を耕し。明日の獣と射す。之を料理す。又と魚を  
とも焼く。衣履とも縫ひあとし。斯く農工商の  
諸業と。一身を兼めしあり。實に煩くも。さるる小  
ありともや。其世のむねとみる。に小の糟粕と  
合ひ。身小の纏務と纏ふて。所小卧。室の中小居  
て。自ら足まりと思ひ。鄙陋と離る。心軽うあ  
る。百年の久しきと経ても。尚や同化の樂趣ある  
と知る。ざりき。文明の世とありては。然らば。今  
其業を棄めし。他の事と兼ねたまといふ。やうと

あく。明け暮れは只一の事小の。ん力とるをゆへ  
小。自然と其業小熟し。及くふ。新工夫ある。成  
す小及べり。彼の鄙陋ある。是候小較ぶる小。其勞  
作小あし。其利益ハ數倍あり。故小汚穢と衣  
て。ハ珍と食ひ。大層な屋小住し。あづ不足とも  
あとも

一つの業とさざり。一人あし。と為るものとな  
らば。一業とま。數人小分業するあり。工匠の  
一物を製造する小。其事業の中小。いろくある

糸の何と云ふ。分深の理と云ふべし。壁へハ小  
刀と製するあり。先づ刀身と歩つより。こまを磨  
ぎ。柄と作る。小刀と云ふ。それくの手教と經  
て。彫く一の小刀と云ふ。經漸うて。こまと分業  
といふあり。即ち此の小刀と製するあり。刀身と  
歩つものハ。身のこまと云ふ。又と磨ぐ者ハ。磨ぐ  
のこまと云ふ。柄と作るものハ。柄のみと作るあり  
のこまと云ふ。若く一の身のこま。かちと云ふあり  
あり

此の仕方あり。業と分つるにハ。大ハ生産の力と  
増して。其の削るべく。ぎる者あり。其の極ハ。假  
令一人あり。一業と全く管む者といふ。ども。其仕  
うと云ふ。小。あまを小分して。自づり。分業の  
法と用ゆ。壁へハ拵師あり。十二肺の卓子と作  
らん。先づその木どりとありて。及十二の板  
と作り。十二の肺と作り。法具全使して。一時ハ十  
二の卓子と組立てるあり。あま小教人あり。其卓  
と云ふ。一人ハ板と削り。一人ハ肺と作り。



卓子と製する如き所と造るふ。鋸(のこぎり)を用ひ板と  
割るふ。鋸(のこぎり)を用ひべりとは。即ち鋸と捨て。鋸と  
交るあどしく。益み時と失ふあり。一事と事一  
ふたをこれに。是と捨てる。彼と受ける。は別ある  
たとく。鋸と持つもの。始終鋸と使ひ。衝と持  
ものの。始終鋸と使ふごとく。甚ふあきて。甚う  
み速むあと。破竹の勢いある振あり。右の迅速あ  
るふより。生産ふむつとも。必らな多少の遠ひ  
りあり。まゝ鋸張屋あり。仕事場ふ炭と入る

火と殺く。而して外の事に移りて。右の火と捨て  
盡くし給ひ。其炭皆灰に化し。無用の費とありて。  
此の換ひ。取り丸もべうべう。若く又外の事あり  
て。再び火と焚んふ。又以前の色の炭と費さ  
ざらば。其用とあらざるふあり。  
第三 一人あり。一事とありて。他と兼ふざらと  
さひ。其術精妙ありて。故に力盡へ。鋭利の  
刃物とあ上げ。刃をのき子と。しども。一目み教  
子の釘とあつべし。然るふ今。右の刀やと。て。釘

と云ふ。さういふ。彼の童子のおつとて。うふ。及。いざ  
う。い。く。ん。是。い。く。ん。其。業。ふ。あ。う。と。智。と。さ。う  
の。あ。ひ。あ。り

又。曰。業。と。分。つ。と。れ。い。更。ふ。生。産。の。力。と。増。え。べ  
き。機。械。と。工。夫。と。自。ら。勞。作。と。有。く。あ。る。が。故。に  
あり。其。故。ハ。一。業。と。分。ち。て。數。保。と。あ。る。と。れ。い。の。保  
保。ふ。お。あ。ち。う。る。機。械。と。工。夫。と。あ。る。と。れ。い。の。保。易。や  
て。所。ふ。其。保。業。も。亦。勞。作。ふ。あり。ゆ。へ。若。し。分  
保。の。法。何。う。さ。れ。ば。一。車。の。釘。と。製。造。さ。る。や。も。其

工。夫。甚。ど。困。難。な。り。て。誰。も。利。と。あ。る。機。械。と。考。へ  
出。る。もの。あ。る。さ。う。な。い。御。う。ふ。あ。と。と。分。保。して。  
一。人。ハ。鉄。と。延。一。人。ハ。あ。と。と。切。り。一。人。ハ。帽。子  
と。附。け。板。の。を。板。の。機。械。と。用。や。と。ば。殊。小。容。易  
ある。仕。業。と。あ。る。あり

又。ハ。一。の。業。と。數。保。ふ。分。つ。つ。と。く。工。作。小。難  
易。の。二。つ。あり。又。と。工。作。さ。る。人。ハ。巧。拙。の。二。つ。あ  
る。なり。即。ち。此。一。保。ハ。精。巧。ある。仕。業。中。ハ。小。あ。と  
と。數。年。の。間。熟。練。さ。る。者。ふ。あ。る。さ。う。な。い。ハ。亦。難



一。彼の一課の簡易ありて。童子ありて。故に巧者の給令へ。一日小二三ありて。拙工の一分二分ありて。其の如く。其課の分配法ありて。易きも難きも。皆巧者のよみて仕上るとき。自然と所拘の優劣くあるあり。今今課の法より見て。易きこと。拙工に作らる。難きこと。巧者に作らる。其巧拙よりて。給金と罷てがふゆへ。お拘の優劣。自然と減増する理あり。

今課の切よりて。巧者人自在に。所拘の所拘と。拙工の所拘と。其一例と。挙ぐるゆへ。拙工に婦人あり。十かの計に用ひ付る。能く作るとして。あると。拙工にむく。其一本の優三米。まゝに。一歩の長さあり。且つ其細工に粗造あるべし。是れあり。其其業お習はざるゆへあり。拙工に。今日用ゆる所の計と見る。其優劣十かありて。一米に足らざる。其あると。同じふ。云々里外の他。より来り。其の優の中。拙人の給料ある。

利令。海上の運賃も。よく新らざるはあり。實に  
其系<sup>り</sup>の廉<sup>れ</sup>あると。雖も。いふ。こゝに。其<sup>り</sup>の  
全<sup>れ</sup>。分業の仕法。あるものあり  
然れども。此の分業。自然の定<sup>き</sup>なり。て。無<sup>き</sup>法。小  
分けし。て。利あるものなり。一業。自  
ら。一定の保<sup>り</sup>あり。其保<sup>り</sup>を。一室の  
分とあり。其一定と。各人へ保<sup>り</sup>を。一室とあり。其利あること  
あり。

分業の可否。失ひ一人の。分業。おとび。一室の。分  
業の。分業。おとび。

一の分業と。企つものなり。然れども。おとびの。分業と。  
修へ。おとび。可く。修へ。今十人と。召し。使  
ふ。と。車業。ある。おとび。先づ十人の。保<sup>り</sup>。保<sup>り</sup>。  
と。と。材料。機械。と。備へ。一も。不足。と。と。而  
し。十日。あり。て。生産。成。然。も。者。ある。と。と。十日  
の間。い。おとび。と。おとび。と。能。と。と。毎。令。一日  
と。強。て。成。然。も。と。能。と。と。と。と。新。と。

次の業は取り扱ふべきの間、併の工人と召し使ふ。充分の成金ありきべし。此ゆへに用け初めの必要は、大いある工業と記さるゝ。然るに人に整然と成金儲けを候ふ。故て精巧の品物と生産するも此乃理あり。日小月小。世上の需利加増して生産さるゝ品物の。直ち小銷路あり。必土小なり。ぎまば。分業の法と行ふべし。いまだ十人の分業とり。衣針と製して。その賣と云ふ。同へば。終る一人の工倍

あり。充分ありといふ。物とこれに保業と分つとも。其益ありあり。おの賣れる。あとの。多きと寡きと。外小種々の縁故あり。又が為小。世上の需用小。多少と生ずるあり。第一は。その賣の。人運の盛んあると。おとろへとふよるものあり。一商家の。初邑の。帽子と需用さるゝこと。而。新の。郷里小。百姓。富家の。百人。小。馬。の。子人。小。務る。道理あり。時運の。困窮。必土の。貧富。小。懸。て。よろしく。進退。を。べ。き。もの。あり。

時運の興化もふ路も。河海と通。道路と修  
め。舟車の便利と増。路も一水の職業とを  
め。一般の利益と為る。盡し運送もろと易  
け。運賃自ら減じて。物の賃自ら下落も。今日  
百里の外より来るお物の賃。若し十里の外よ  
り来る賃も同じ。是今の百里の運賃と。若し十里  
と同じさ。ゆへ人皆この廉賃の。お物と沽ひ  
けるあり。お賃下落をれば。この銷路も次身も開  
け。若し人の分業も。餘り。うるお物とも。今

日ゆえ。二十人。小分課も。とも格別冗費とい  
な。ざるなり

又銷路の廣き。賃さ。お賃のろさ。低さ。ある  
なり。ろさ。のハ。賣さ。ざる。お。ろ。ざる。ども。買  
者。ある。され。之。と。買。ふ。と。は。世。の中。お。買  
者。若。は。ろ。ざる。笑。さ。の。多。さ。ゆ。へ。お  
の。ろ。さ。の。ハ。お。賣。さ。る。と。を。ふ。若。し。大。お  
る。と。製。して。お。買。の。需。お。お。んと。歎。せば。今日  
必。用。の。お。あ。る。生産。の。費。へ。極。め。る。廉。し。て。は。お

ても。法い易き物に限るべし。故に分業の法と云ふ。物價の下落もさういへ。多くは貧者の其恵と破るものなり。珠玉の如き高價の品は。二三十年前も。今日も。著しき下落なりといふ。其絨布磁鐵の如き。法人日用の品物なりては。其價い昔の半分にも足らぬ。斯くおとく物價下落すといふ。貧しき者おたのむ。殊に莫大の利益と云ふあり

前段の論を説き遺し。分業の一端あり是に

土地の撙括に及ぶ工業の嘆あるなり。更に密柑。棉花。番薯。米穂など。赤土より北の地あるにせむ。麦。蕎麥。苧草など。赤土より南の地を産せざる。人のよく知る所あり。是と更し細く分かつたに。一郡は石炭と生。一郡は塩と出。鐵礦あるもあり。銅礦あるもあり。この國の平地多くして。米穀と作るに便し。那の國の草沃多くして。牛羊と牧ふべしとわかれ。風土のおのの。同じうと考ふるふそのまゝとす

生業とあり。遂ぐへきよ小。天より織興して所  
りつゝあり。故に吾々の生業と勤め。生産とあり  
て。有無と交易とをとりあり。以國ハ。彼の玉の華  
と哭ふ。其需用と充ぐ。又彼は。以國の麦と  
求めて。其用便と足し。それくおむの産物と。交  
易とをとり。以國ハ。兩地ハ。物く。米と麦とを生む  
より。其價廉なり。其利大ひあり。依て衆  
も。小。天より物と。吾國ハ。配分して。一國ハ。一  
物の名産と賜ふ。交際と親密とをさしめ。四海

一家。彼我兄弟の類と。得る。むる。あり。一。あり。小  
彼と我との幸福ハ。除減あり。ハ。其信睦の厚薄ハ  
出で。そのありと知るべし

第四章 工業の利分ハ。生産力の増進ハ  
ゆるむと論を

抑も工業と管みて。労作と惜まざる。主名ハ。世  
の幸福と得る。小。あり。農夫ハ。天小汗と流して。  
田地と耕し。織物師ハ。終日機杼とよみ取り。履造  
ハ。朝夕草と縫する。皆世の幸福と求めんが

あり

一定の労働とりつゝ一定の生産力と増えたと  
ハ刻ち其増えつゝの。其人の幸福とある。農夫  
の良き田地を耕すものハ。其生産の多。悪き田  
地の一倍ある。之と一年の労働を換りてつゝ  
と云ハ。其力とを同じくハ同換あるども。良き田  
ハ。二百俵の麦と收め。悪き地ハ。二百俵の麦と納  
む。さきき良田より。收むる所の二百俵だけハ  
即ち其農夫が利分と云ふと云ふことと知るべ

一。故小悪き田地百畝と得るハ。良き田地五十畝  
と得るハ。如きさうの理あり

さて今糞肥と種と或ハ培養の良術と工夫して。  
右の悪き田と一畝一畝良き田と考へざる。收穫  
ある時ハ。刻ち其結果ありてハ。精巧の器械と  
用ひて生産の力と増へ。一日の労働と以て。二日  
の収入と得るハ。果あることあり

此の理ハ。農工の差別とある業と當むものハ。皆  
同様と云ふハあり。譬へば持物師なり。初めと其

業と同じくして、七日ありて一拵の車と製  
うるが、追々切と積みて、四日小一拵と製し、終小  
ハ其業小熟練して、一日小一車と製する小あり。  
其生産の力ハ、其始め業と異なり、時小六倍、其  
結果と云ふと、一日の労作あり、六日の幸福  
と得るが如しと受けうるあり。又と藤藤と詠し、或  
ハ蒸氣機械と用ひ、或ハ分業の方法と行ふ。一  
日小二拵の車と製する小あり、其生産さう小  
進んで、得るとあるの便利も、得て加増もある

ベ

紡糸と織屋あり。小あり、縮む。小あり、織り。他小号  
作と省さく、時と縮むる制ありと、一日小出  
来るところ。僅小一拵の線、一尺の布小過さざる  
べし。若し紡車と数時、機械と使用するときは、  
生産の力小増長し、一日の労作あり、十日二十  
日分の線布と得、即ち十倍二十倍の利益と受  
けく。忽ち過分の蓄積とあるあり。今又と奇機、如  
工と工夫するところハ、其業更小倍大ありて、一日



の労作あり。百日の生産とも製し。即ち百倍の幸  
福を受け。然るに富者とあるあり。是実ふ人々  
の。今日ありつる業の上。はれてるふりのある  
べ。只る筆先のあり。思ふべく。徹ふ東西の  
印發人とあるふ。其生るつき愚昧ふして。機械や  
分業といふことと知るむ。其生産は若く十指より  
出るその外ありと思ひ。かゝる労作と省き  
時と縮むるの心機あるあり。是れ人の工業  
の利器と用ひざるべ。大強みとあり。大福基と。集

くべう。はて。終身赤貧を免るむ。何れや。交の  
人民の如き。は。探出の群りあるふ。是れ。是れ  
世の幸福あると知るむ。斯く人々の生産。僅か  
あり。がゆゑふ。一國の景況も凄涼とて。みるべ  
きものあり。をまき。その富饒と形み。ふ。果ふ  
て飢と凌ぎ。棉衣を。空と防ぐもの。其資財と云  
へ。一枚の獣皮。一張の弓。過ぎざるあり。是と  
今日此國の力作も。僱民も。較らざるも。實富若  
未富。不富。饒の隔あり。彼の職工。一日の給料。一

米小異らざるも。我小ありてハ。婦人とりど  
も。一畝の給料とけり者あり。さう世の法と解  
るふ。衣食足りて廉恥を知り。子女あはば学校ふ  
入る。身の前途と安んずる。教育と受けしむ  
あり。あは小授りてるなり。工業の進る。生産  
の増ふ。陸ふ。力作するもの。雇賃貴くあり  
て。終ふハ上下一般の利益となることあり。  
今や若し不幸ありて。機械止滞し。運轉せざる  
ハ。吾人衣食の資と失ふ。忽ち飢寒の苦と受

くべし。故小知る機械と改む。工作と長進する  
ハ。即ち凍餓の難と防ぐの方術と云ふとあらざる  
哉

一人生産の量と得るとは。即ち其人の大利と  
ある。あは小同じく。一畝の生産と増ふなり。即  
ち其畝中の大益となるなり。譬へば米年の收納  
量。今年小一倍して。米。麦。棉。布大ひふ量。變へ。山。海  
の漁獲より。礦山。工場。の製産ふ多るなり。恒はあ  
るなり。利ち米年ハ。一日の労働とあり。今年



ふいふぬものあり。其故ハ一年十萬金の身代  
あるもの。石炭百貫目。又あるも二十數ふ  
ても。羅紗一疋。又あるも二十數あるも。其  
候の<sup>きき</sup>ききも。がたなり。世の難易と覺へど。候  
令<sup>きき</sup>候の<sup>きき</sup>物なりとも。あると<sup>きき</sup>候も。時ハ。あると  
候。おしも<sup>きき</sup>割<sup>きき</sup>肘の患ひなり。その<sup>きき</sup>業入二百金。  
三百金。ぐいある者の如きハ。お<sup>きき</sup>候の<sup>きき</sup>昇<sup>きき</sup>降<sup>きき</sup>ふよ  
り。生<sup>きき</sup>計の<sup>きき</sup>苦<sup>きき</sup>楽<sup>きき</sup>と生<sup>きき</sup>ず。廉<sup>きき</sup>ある<sup>きき</sup>意<sup>きき</sup>の<sup>きき</sup>ま<sup>きき</sup>ふ<sup>きき</sup>ふ  
物と<sup>きき</sup>備<sup>きき</sup>ぬ。貴<sup>きき</sup>なる<sup>きき</sup>は<sup>きき</sup>唯<sup>きき</sup>今日の<sup>きき</sup>衣食<sup>きき</sup>と<sup>きき</sup>毎<sup>きき</sup>日<sup>きき</sup>て。必<sup>きき</sup>用

の<sup>きき</sup>缺<sup>きき</sup>け<sup>きき</sup>と<sup>きき</sup>補<sup>きき</sup>ふ<sup>きき</sup>の<sup>きき</sup>と<sup>きき</sup>め<sup>きき</sup>。懋<sup>きき</sup>安<sup>きき</sup>の<sup>きき</sup>品<sup>きき</sup>と<sup>きき</sup>求<sup>きき</sup>む<sup>きき</sup>  
と<sup>きき</sup>能<sup>きき</sup>ふ<sup>きき</sup>。と<sup>きき</sup>れ<sup>きき</sup>ば<sup>きき</sup>新<sup>きき</sup>機<sup>きき</sup>械<sup>きき</sup>と<sup>きき</sup>工<sup>きき</sup>夫<sup>きき</sup>て。生<sup>きき</sup>産<sup>きき</sup>力<sup>きき</sup>  
と<sup>きき</sup>情<sup>きき</sup>を<sup>きき</sup>ハ。素<sup>きき</sup>より<sup>きき</sup>諸<sup>きき</sup>人<sup>きき</sup>の<sup>きき</sup>利<sup>きき</sup>益<sup>きき</sup>と<sup>きき</sup>り<sup>きき</sup>ども。新<sup>きき</sup>中<sup>きき</sup>を  
の<sup>きき</sup>日<sup>きき</sup>か<sup>きき</sup>ぎ<sup>きき</sup>れ<sup>きき</sup>の<sup>きき</sup>小<sup>きき</sup>民<sup>きき</sup>ふ<sup>きき</sup>あり<sup>きき</sup>て<sup>きき</sup>ハ。実<sup>きき</sup>ふ<sup>きき</sup>莫<sup>きき</sup>大<sup>きき</sup>ある<sup>きき</sup>意<sup>きき</sup>  
と<sup>きき</sup>。最<sup>きき</sup>る<sup>きき</sup>と<sup>きき</sup>い<sup>きき</sup>ふ<sup>きき</sup>べ<sup>きき</sup>ー

さ<sup>きき</sup>く<sup>きき</sup>生<sup>きき</sup>産<sup>きき</sup>の<sup>きき</sup>力<sup>きき</sup>と<sup>きき</sup>情<sup>きき</sup>を<sup>きき</sup>ハ。新<sup>きき</sup>中<sup>きき</sup>を<sup>きき</sup>ハ。一<sup>きき</sup>の<sup>きき</sup>股<sup>きき</sup>俸<sup>きき</sup>出<sup>きき</sup>来<sup>きき</sup>  
も。其<sup>きき</sup>由<sup>きき</sup>ハ。一<sup>きき</sup>の<sup>きき</sup>者<sup>きき</sup>ー二<sup>きき</sup>人<sup>きき</sup>あり<sup>きき</sup>て<sup>きき</sup>ハ。工<sup>きき</sup>業<sup>きき</sup>と<sup>きき</sup>も。今<sup>きき</sup>  
日<sup>きき</sup>より<sup>きき</sup>ハ。一<sup>きき</sup>人<sup>きき</sup>あり<sup>きき</sup>て<sup>きき</sup>ハ。自<sup>きき</sup>ら<sup>きき</sup>雇<sup>きき</sup>ひ<sup>きき</sup>の<sup>きき</sup>路<sup>きき</sup>  
塞<sup>きき</sup>ぐ<sup>きき</sup>り。随<sup>きき</sup>て<sup>きき</sup>小<sup>きき</sup>民<sup>きき</sup>の<sup>きき</sup>利<sup>きき</sup>益<sup>きき</sup>と<sup>きき</sup>。此<sup>きき</sup>難<sup>きき</sup>難<sup>きき</sup>ハ<sup>きき</sup>送

理の上の。保解と招くものなりとも。人死と惑死と  
 て。世上の害とある事ありとも。先づ一の例と  
 挙げて。明く示さざる可と。後破も一。救世  
 難題の理み似て。非あるといふ事と。今日実地  
 てあると痛むのみ。実不同と役り。當時極め  
 て。多くの僱工と用いて。製造する。何の物ある  
 や。又此の二十年の間。僱工の数と大いふ増  
 多い。何の業あるやと尋ふん。産物本棉織の製  
 造第一ありと答ふなり。又新機械と云うて。最

も骨朽と省さる。早く仕上げらるゝ。何の業か  
るやと問ふ。まゝ本棉織の製造か。就そのふ  
いと答ふべし。先づ麻布と本綿のふと較べん  
るか。麻布の製造は。多分僱工のふより出来し。本  
綿の製造は。機械を用ひてあるあり。孰るふや  
僱工と較ぶる。麻工の雇ひ賃は。甚ど<sup>著しく</sup>廉く。志  
て目小業へ。棉工の雇ひ賃は。却て高く。その僱工  
年々ふ。お惜しめて盛んあるある。吾の能く知る  
とあるなり。此<sup>わづら</sup>実態と爲る考あるとせん。機械

と用ひるべし。必だ莫大の利益ありて、新も僱民の  
生計に換害あるの結果と。然るもふ思ふに、  
機械を用ゆるに、利あるのより、弊ある  
あとと。爰に痛むべし。今爰に一邑を以て、棉布一疋  
の價二歩ありて、一年中一疋疋と捌け賣る。右  
一疋疋の棉布と製造するも、百人の僱工と使  
ふより、若く新の機械と工夫して、百人ありて  
一疋疋と製造するに、他の五十人ハ其業と失ふ  
るにあらずや。然るも、此の新機械の工夫あり

りてより、棉布の價半減して一疋を賣とある時  
に、實主の致達を増して一年二疋疋と製造せさ  
るば、需用も充つるが不足を、一疋疋製造の數  
一倍も増え、僱工の數ハ元は不足が半減する  
と、より、高は百人と使用せざるべしと。然  
るに、いふ民も其業と失ふの患あり、故に棉  
布一疋の價二歩あり、其の産ある者の、其  
いふより、今日、一歩とあると、其ハ百人の  
産あるものも、其ハ其の産あるものと、其ハ

多とがど人より少の産。百家所をバ又百の  
産ハ二百家所へて割合なり此の二百家所ハ  
棉布の賣主とあると知ハ其需用のともありも僱  
工の數と知ハ且つ又少の産所者ハ僱主と  
一々買主たるがやハ小全く又百の賣主新ハ  
加増ハ加る少あるが九百の八百七の  
六百の産所者とも買主の數ハ算入する  
とハ昔ハはすむバ十倍二十倍の棉布と織り出  
しても其賣主とあると流るがとおくある人共

上僱主とあると知ハことごとく費と惜んで。棉布と  
用ざる人々でも。棉布と用ゆる少あるべし。此系  
の事とも知ハ其め。倫と立つる時ハ創工業と  
改正して。生産の力と増え不従ひ。僱工の雇は  
れ美し。而して労働と省る力と縮むべき機械と  
用ゆる不従ふ。僱工と不従ふと益く多。  
るつゝ新機の益的あるがたのハ。遊々各業の人  
々の。道理あると知るべし

云一さりのあり。其れハ機械と用ゆると云ハ。雇  
工の直と請いて。一己の利分とあるのそあるを  
後と他人と共ハ。一層の公益と蒙るものあり。蓋  
し新機と發明せれば。物價自然と下る。即ち  
今日吾人の使用する。絨襦。棉布。其他書籍。紙什の  
類と見るハ。數年ハ較ぶるハ。其價元々半減し  
其上ハ細工精細なり。耳目と悦ハ。むるハ。是  
を。試ハ今日中第の人衆と見るハ。衣食。住。玩。皆若  
と云一美と極めざるハ。可。是と全く雇工の全

＞

國と作ハ其利と蒙るものあり。こをを概してい  
へバ。雇工ハ其賃お給して。一分の利と得べし。又  
と物價下るす。ハ然き。商人と共ハ廉物と稱  
めゆ。二重の益と蒙るものとあるあり  
商家ハいつてハ。時運進歩せられども。其實ハ出  
金銀の利益の増を云ふなり。ハ。廉價の不利と  
當ハ用ゆるものあり。一重の益ハ止まるなり  
其のゆへハ世上の庶民。富と論ぜども。貧と論ぜども。  
製するものも用ゆるものも。機械の發明。物價の



下落小然きて。衣食の需用より。機案の差付小玉  
るまぐ。まどろみ小哭ひ涙みく。缺乏ひそくの患あると  
あり。然らば別ち。一つの機械と察し。一つの新  
法と工夫しある者なり。人民の大恩至りしべ。多敷おほく  
いて。其勞苦と耐えんべ。第一四法と操守して。  
新機と操教もそのある時なり。時運の開化と明  
げ。吾人の生計と害して。世の罪人といふぞ。  
則ち苟くも一人の利とあるべし。あちが他  
人の益とあるものあり。而して又他人と

利とある者なり。あちがて一己の益ふ。後らざるの  
理あるとあり。

經源便覽卷之一

二